

去る日の暴風雨は我等生れてから以来第一の騒なりしと、常は何事に逢ふても二十年前三十年前にありし例をひき出して古きを大袈裟に、新しきを訳も無く云ひ消す氣質の老人さへ、真底我折つて噂仕合へば、まして天変地異をおもしろづくで談話の種子にするやうの剽軽な若い人は分別も無く、後腹の疾まぬを幸ひ、何処の火の見が壊れたり彼処の二階が吹き飛ばされたりと、他の憂ひ災難を我が茶受とし、醜態を見よ馬鹿慾から芝居の金主して何某め痛い目に逢ふたるなるべし、さても笑止彼の小屋の潰れ方はよ、又日頃より小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、御神楽だけの事はありしも気味よし、それよりは江戸で一二といはるゝ大寺の脆く倒れたも仔細こそあれ、実は檀徒から多分の寄附金集めながら役僧の私曲、受負師の手法、そこにはその有りし由、察するに本堂の彼の太い柱も桶でがな有つたらうなどと様々の沙汰に及びけるが、いづれも感応寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一枚剥がれざりしに舌を巻きて讚歎し、いや彼塔を作つた十兵衛といふは何とえらいものではござらぬ歟、彼塔倒れたら生きては居ぬ覚悟であつたさうな、すでの事に撃啣んで十六間真逆しまに飛ぶところ、欄干を斯う踏み、風雨を睨んで彼程の大揉の中に泰然と構へて居たといふが、其一念でも破壊るまい、風の神も大方血眼で睨まれては遠慮が出たであらう歟、甚五郎このかたの名人ぢや真の棟梁ぢや、浅草のも芝のもそれぞれ損じのあつたに一寸一分歪みもせず退りもせぬとは能う造つた事の。いやそれについて話のある、其十兵衛といふ男の親分がまた滅法えらいもので、若しも些なり破壊れでもしたら同職の恥辱知合の面汚し、汝はそれでも生きて居られうかと、到底再度鉄槌も手斧も握る事の出来ぬほど引叱つて、武士で云はば詰腹同様の目に逢はせうと、ぐるぐるぐる大雨を浴びながら塔の周囲を巡つて居たさうな。いやいや、それは間違ひ、親分では無い商売上敵ぢやさうな、と我れ知り顔に語り伝へぬ。

暴風雨のために準備狂ひし落成式もいよいよ済みし日、上人わざわざ源太を呼び玉ひて十兵衛と共に塔に上られ、心あつて雑僧に持たせられし御筆に墨汁したゝか含ませ、我此塔に銘じて得させむ、十兵衛も見よ源太も見よと言ひつゝ、江都の住人十兵衛之を造り川越源太郎之を成す、年月日とぞ筆太に記し了られ、満面に笑を湛へて振り振り玉へば、兩人ともに言葉なくたゞ平伏して拝謝みけるが、それより宝塔長へに天に聳えて、西より瞻れば飛檐或時素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅日を呑んで、百有余年の今になるまで、譚は活きて遣りける。